

(11) 特許出願公開番号

特開2010-81073

(P2010-81073A)

(43) 公開日 平成22年4月8日(2010.4.8)

(51) Int.Cl.

F l

テーマコード (参考)

HO4M 9/00 (2006.01)

HO 4M 9/00

D

5C086

G O 8 B 25/04 (2006.01)

G O 8 B 25/04

K

5C087

G O 8 B 25/00 (2006.01)

G O 8 B 25/04

J

5 K 0 3 8

G O 8 B 21/02 (2006.01)

G O 8 B 25/00

5 1 0 D

G O 8 B 21/02

審査請求 未請求 請求項の数 5 O L (全 9 頁)

(21) 出願番号 特願2008-244608 (P2008-244608)

(22) 出願日 平成20年9月24日 (2008. 9. 24)

(71) 出願人 000100908

アイホン株式会社

愛知県名古屋市中村区神野町2丁目18番地

(74) 代理人 100121142

弁理士 上田 恭一

(72) 発明者 楠 浩和

愛知県名古屋市熱田区神野町2丁目18番
地 アイホン株式会社内

(72) 發明者 安藤 範吉

愛知県名古屋市熱田区神野町2丁目18番
地 アイホン株式会社内

(72) 発明者 安東 徹

愛知県名古屋市熱田区神野町2丁目18番
地 アイホン株式会社内

最終頁に続く

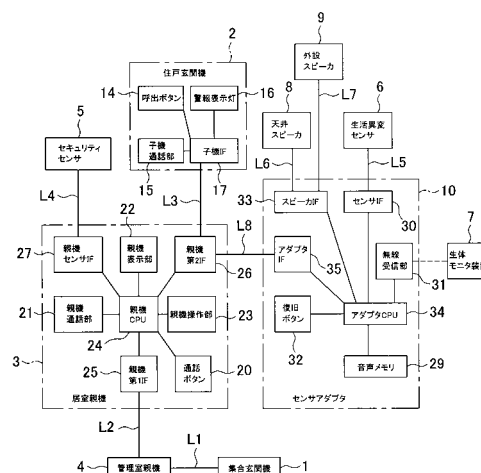
(54) 【発明の名称】 集合住宅インターホンシステム

(57) 【要約】

【課題】 生活異変センサが異常検知信号を出力しても、それが誤動作である場合は外部に通報しないよう動作させることが可能な集合住宅インターホンシステムを提供する。

【解決手段】 居室親機３に、火災感知器やガス漏れ感知器等のセキュリティセンサ５と、居住者の異変を検知する生活異変センサ６が接続されたセンサアダプタ１０とが接続され、センサ５，６が異常を検知したら警報発報する一方、センサアダプタ１０には住戸内で警報を発報する天井スピーカ８と、住戸玄関等住戸外で警報を発報する外設スピーカ９とが接続されている。アダプタＣＰＵ３４は、生活異変センサ６が異常を検知したら、天井スピーカ８から警報を発報させ、異常を検知してから所定時間経過しても異常を検知し続けたら、居室親機３に異常発生信号を送信すると共に外設スピーカ９から警報を発報させる。

【選択図】 図2



【特許請求の範囲】**【請求項 1】**

集合住宅の集合玄関に設置されて居住者を呼び出すための集合玄関機と、集合住宅の各住戸玄関に設置されて居住者を呼び出すための住戸玄関機と、前記集合玄関機及び前記住戸玄関機からの呼び出しに応答するための居室親機と、管理室に設置されて前記集合玄関機及び前記居室親機と通話が可能な管理室親機とを有する集合住宅インターホンシステムにおいて、

前記居室親機には、火災感知器やガス漏れ感知器等のセキュリティセンサが接続されて、前記セキュリティセンサが感知動作したら警報を発報する親機発報制御部を有すると共に、居住者の異変を検知する生活異変センサが接続されたセンサアダプタが接続され、前記センサアダプタは、住戸内で警報を発報する天井スピーカと、住戸玄関等の住戸外で警報を発報する外設スピーカと、前記生活異変センサから異常発生信号を受けたら前記天井スピーカ、及び前記外設スピーカから警報を発報させるアダプタ発報制御部とを有し、前記アダプタ発報制御部は、前記生活異変センサが異常を検知したら、前記天井スピーカから警報を発報させ、その後所定時間経過しても前記異常を検知し続けたら、前記居室親機に異常発生信号を送信すると共に前記外設スピーカから警報を発報させることを特徴とする集合住宅インターホンシステム。

10

【請求項 2】

前記センサアダプタが前記居室親機へ送信する異常発生信号は移報信号であり、前記居室親機の移報接点入力部を介して送信されることを特徴とする請求項 1 記載の集合住宅インターホンシステム。

20

【請求項 3】

身につけた居住者の脈拍数及び立位や臥位の姿勢情報等の身体情報を検出する生体モニタ装置が無線或いは有線で前記センサアダプタに接続され、前記センサアダプタが前記生体モニタ装置から異常情報を入手したら、

前記アダプタ発報制御部は、前記居室親機に異常発生信号を送信すると同時に前記天井スピーカから警報を発報させ、異常情報を入手してから所定時間経過しても前記異常情報が継続していたら、前記外設スピーカから警報を発報させることを特徴とする請求項 1 又は 2 記載の集合住宅インターホンシステム。

【請求項 4】

前記センサアダプタは、異常を検知したセンサ等の種類に応じて異常内容を報音するための音声メモリを有し、

前記アダプタ発報制御部は、前記天井スピーカ、前記外設スピーカの少なくとも一方から音声により異常発生及び異常内容を報知することを特徴とする請求項 1 乃至 3 の何れかに記載の集合住宅インターホンシステム。

30

【請求項 5】

前記住戸玄関機は異常発生を報知するための警報表示部を有すると共に、前記居室親機は前記センサアダプタから異常発生信号を受けたら、前記警報表示部を報知動作させる報知制御部を有することを特徴とする請求項 1 乃至 4 の何れかに記載の集合住宅インターホンシステム。

40

【発明の詳細な説明】**【技術分野】****【0001】**

本発明は集合住宅、特に高齢者向け集合住宅のインターホンシステムに関し、詳しくは、住戸内に火災感知器等のセキュリティセンサに加えて居住者の異変を検知する生活異変センサを備えた集合住宅インターホンシステムに関する。

【背景技術】**【0002】**

居住者の異常を検知して通報する機能を備えた高齢者向けの集合住宅インターホンシステムが従来よりある。例えば、特許文献 1 の集合住宅インターホンシステムは、火災感知

50

器やガス検知器等のセキュリティセンサに加えて、水量センサや、人感センサ等の生活異変センサを住戸内に設置し、水が予め設定された長い時間帯に亘り使用されない場合や、居住者の動きが検知出来ない場合等の異常を検知した場合も警報を発し、合わせて管理人等に通報するよう構成されている。こうすることで、火災等の検知に加えて居住者に異常があったら外部に通報することで、速やかな対処が可能となった。

【特許文献1】特開2003-134243号公報

【発明の開示】

【発明が解決しようとする課題】

【0003】

しかしながら、上記従来の集合住宅インターホンシステムでは、生活異変センサが動作して異常検知信号を出力したら、直ちに住戸外でも警報が発報されるため、生活異変センサの過剰動作や誤動作等で誤報が発生した場合にも、居住者が誤報に気づく前に外部に通報され、管理人や近隣の居住者に余計な手間を取らせていた。

そこで、本発明はこのような問題点に鑑み、生活異変センサが異常検知信号を出力しても、それが誤動作である場合は外部に通報しないよう動作させることが可能な集合住宅インターホンシステムを提供することを目的とする。

【課題を解決するための手段】

【0004】

上記課題を解決する為に、請求項1の発明は、集合住宅の集合玄関に設置されて居住者を呼び出すための集合玄関機と、集合住宅の各住戸玄関に設置されて居住者を呼び出すための住戸玄関機と、集合玄関機及び住戸玄関機からの呼び出しに応答するための居室親機と、管理室に設置されて集合玄関機及び居室親機と通話が可能な管理室親機とを有する集合住宅インターホンシステムにおいて、居室親機には、火災感知器やガス漏れ感知器等のセキュリティセンサが接続されて、セキュリティセンサが感知動作したら警報を発報する親機発報制御部を有すると共に、居住者の異変を検知する生活異変センサが接続されたセンサアダプタが接続され、センサアダプタは、住戸内で警報を発報する天井スピーカと、住戸玄関等の住戸外で警報を発報する外設スピーカと、生活異変センサから異常発生信号を受けたら天井スピーカ、及び外設スピーカから警報を発報させるアダプタ発報制御部とを有し、アダプタ発報制御部は、生活異変センサが異常を検知したら、天井スピーカから警報を発報させ、その後所定時間経過しても異常を検知し続けたら、居室親機に異常発生信号を送信すると共に外設スピーカから警報を発報させることを特徴とする。

【0005】

この構成によれば、生活異変センサが異常を検知すると、天井スピーカと外設スピーカの双方で異常発生を報知するので、居住者自身に加えて近隣の居住者も異常発生を把握し易い。但し、外設スピーカは異常が発生してから所定時間経過してから警報を発するので、誤報である場合は、外設スピーカが発報する前に居住者が停止させる等の処置を行うことができ、外設スピーカからの発報に対して誤報を無くすることが可能となり、近隣住人や管理人に余計な手間を掛ける事態を防ぐことができる。

また、セキュリティセンサは直接居室親機に異常発生を送信して居室親機が発報し、生活異変センサはセンサアダプタに異常発生信号を送信して増設スピーカ等が発報するので、互いに信号経路が異なる。そのため、セキュリティセンサ側の配線経路を触ること無く、センサアダプタ側のセンサの変更等を行うことができ、生活異変センサ等の変更操作してもセキュリティセンサ側の信頼性が劣化するようなことがない。

【0006】

請求項2の発明は、請求項1に記載の構成において、センサアダプタが居室親機へ送信する異常発生信号は移報信号であり、居室親機の移報入力端子を介して送信されることを特徴とする。

この構成によれば、居室親機は既存端子によりセンサアダプタからの信号を受信するため、居室親機の改造が不要となり、コストアップと成らない。

【0007】

請求項 3 の発明は、請求項 1 又は 2 に記載の発明において、身につけた居住者の脈拍数及び立位や臥位の姿勢情報等の身体情報を検出する生体モニタ装置が無線或いは有線でセンサアダプタに接続され、センサアダプタが生体モニタ装置から異常情報を入手したら、アダプタ発報制御部は、居室親機に異常発生信号を送信すると同時に天井スピーカから警報を発報させ、異常情報を入手してから所定時間経過しても異常情報が継続していたら、外設スピーカから警報を発報させることを特徴とする。

この構成によれば、生体モニタ装置が異常を検出したら生活異変センサの場合と同様に発報するので、近隣の居住者が異常発生を把握し易い。

【0008】

請求項 4 の発明は、請求項 1 乃至 3 の何れかに記載の構成において、センサアダプタは、異常を検知したセンサ等の種類に応じて異常内容を報音するための音声メモリを有し、アダプタ発報制御部は、天井スピーカ、外設スピーカの少なくとも一方から音声により異常発生及び異常内容を報知することを特徴とする。

この構成によれば、異常発生内容が音声で報音されるので、どのような異常が発生したのか速やかに認識することができ、対処し易い。

【0009】

請求項 5 の発明は、請求項 1 乃至 4 の何れかに記載の構成において、住戸玄関機は異常発生を報知する警報表示部を有すると共に、居室親機はセンサアダプタから異常発生信号を受けたら、警報表示部を報知動作させる報知制御部を有することを特徴とする。

この構成によれば、住戸玄関機からも異常発生を表示して報知するので、近隣の居住者が聴力の衰えた人でも異常発生を認識できる。

【発明の効果】

【0010】

本発明によれば、生活異変センサが異常を検知すると、天井スピーカと外設スピーカの双方で異常発生を報知するので、居住者自身に加えて近隣の居住者が異常発生を把握し易い。そして、外設スピーカは異常が発生してから所定時間経過してから警報を発するので、誤報である場合は、外設スピーカが発報する前に停止させる等の処置を行うことができ、外設スピーカからの発報に対して誤報を無くすることができる。

【発明を実施するための最良の形態】

【0011】

以下、本発明を具体化した実施の形態を、図面に基づいて詳細に説明する。図 1 は本発明に係る集合住宅インターホンシステムの一例を示す構成図であり、1 は集合住宅の共同玄関に設置され、居住者を呼び出すための集合玄関機、2 は各住戸の玄関に設置されて居住者を呼び出すための住戸玄関機、3 は各住戸内に設置されて集合玄関機 1、住戸玄関機 2 からの呼び出しに応答するための居室親機、4 は管理室に設置されて集合玄関機 1 や居室親機 3 と通話が可能な管理室親機、5 は火災発生やガス漏れ等の居室内の異常を検知するセキュリティセンサ、6 は居住者の動きを検知する人体検知センサや水量センサ等の生活異変センサ、7 は居住者が身につけて居住者の身体情報を入手する生体モニタ装置、8 は居室天井に設置されて警報発報等を行う天井スピーカ、9 は住戸玄関等の住戸外に設置されて警報発報等を行う外設スピーカ、10 は生活異変センサ 6 や生体モニタ装置 7 が接続されて、居住者の異変を検知したら居室親機 3 等に通知すると共に発報を制御するためのセンサアダプタである。

【0012】

集合玄関機 1 は管理室親機 4 に伝送線 L 1 で接続され、各居室親機 3、3・・・は親機幹線 L 2 を介して管理室親機 4 に接続され、住戸玄関機 2 は伝送線 L 3 を介して居室親機 3 に接続されている。また、セキュリティセンサ 5 は居室親機 3 に伝送線 L 4 で接続され、生活異変センサ 6、天井スピーカ 8、外設スピーカ 9 は、それぞれ伝送線 L 5、L 6、L 7 でセンサアダプタ 10 に接続されている。また、センサアダプタ 10 は伝送線 L 8 で居室親機 3 に接続されている。更に、生体モニタ装置 7 は、測定した脈拍等を 10 秒等の所定の時間間隔でセンサアダプタ 10 に無線送信する。

10

20

30

40

50

【0013】

ここで、生活異変センサ6、生体モニタ装置7を具体的に説明する。生活異変センサ6は、例えば赤外線等を利用して人物の動きを検知する人体検知センサ、水道水の使用状況を検知する水量センサ、ベッドでの居住者の状態を検知するベッドセンサ、電気機器の操作状況を検知する家電操作センサ等から構成されている。例えば、人体検知センサがリビングルームに設置されている場合、一定時間（例えば、24時間）居住者の動きを感知しなかったら、異常発生と判断して異常検知信号を送出する。また、人体感知センサがトイレに設置されている場合は、一定時間（例えば、2時間）を越えて居住者の存在を感知し続けたら、異常発生と判断して異常検知信号を送出する。

【0014】

水量センサは、水が所定の長時間に亘り連続使用されている場合、或いは所定の長時間に亘り使用されない状態を検出したら異常発生と判断して異常検知信号を送出する。また、ベッドセンサはベッドに居住者が就寝状態にあるか、転落していないか検出し、例えば20時間に亘り就寝し続けている状態を検出した場合、或いは転落を検知した場合に異常発生と判断して異常検知信号が送出される。

【0015】

一方、生体モニタ装置7は、人物（ここでは居住者）が身に付けて、脈拍情報や、立位、臥位の姿勢情報等を測定或いは検知して、測定した情報を例えば10秒等の所定の時間間隔でセンサアダプタ10に無線送信する。

【0016】

図2は図1の各機器の要部を回路ブロックで示している。この図2に示すように、住戸玄関機2には、居住者を呼び出すための呼出ボタン14、居住者と通話するために図示しないマイク及びスピーカを備えた子機通話部15、住戸内に設置されたセンサが異常を検知した場合にそれを表示するための警報表示灯16、伝送線L3を介して居室親機3と通信するための子機インターフェース（子機IF）17等が備えられている。

【0017】

また居室親機3には、呼び出しに応答するための通話ボタン20、来訪者等と通話するために図示しないマイク及びスピーカを備えた親機通話部21、住戸内に設置されたセンサの動作等を表示する親機表示部22、各種設定を行うための親機操作部23、居室親機3全体を制御する親機CPU24、管理室親機4と通信するための親機第1インターフェース（親機第1IF）25、住戸玄関機2と通信するための親機第2インターフェース（親機第2IF）26、セキュリティセンサ5を接続する親機センサインターフェース（親機センサIF）27等が備えられている。但し、親機センサIF27は、センサ等の出力信号等を入力するための移報接点入力部である。

【0018】

そして、センサアダプタ10には、アナウンス音声を記憶する音声メモリ29、生活異変センサ6が接続されるセンサインターフェース（センサIF）30、生体モニタ装置7からの信号を無線受信する無線受信部31、発報動作状態にあるセンサアダプタ10をリセットする復旧ボタン32、天井スピーカ8、外設スピーカ9を接続するスピーカインターフェース（スピーカIF）33、センサアダプタ10全体を制御するアダプタCPU34、居室親機3と通信するためのアダプタインターフェース（アダプタIF）35等が備えられている。

【0019】

このように構成された集合住宅インターホンシステムの動作は以下のものである。但し、集合玄関機1からの呼出操作、居室親機3によるその応答操作等は従来と同様であるため説明を省略し、ここではセンサアダプタ10に接続された生活異変センサ6が動作した場合のシステムの動作を中心に説明する。

【0020】

生活異変センサ6が異常を検知して異常検知信号を出力したら、伝送線L5を介してセンサアダプタ10に伝送される。センサIF30を介してこの異常検知信号を受信したア

10

20

30

40

50

アダプタCPU34は、最初に天井スピーカ8で警報音を鳴動させる。このとき、アダプタCPU34は、音声メモリ29から、異常を検出した生活異変センサ6に応じたアナウンス音声を選択してスピーカIF33、伝送線L6を介して天井スピーカ8に送信し、異常発生を音声により報知させる。例えば「水量センサが作動しました」のアナウンスが天井スピーカ8から報音される。尚、音声メモリ29が記憶するアナウンス音声は、生活異変センサ設置時或いはインターホンシステム施工時に設定される。

【0021】

また、アダプタCPU34は、異常検知信号の受信に合わせて図示しないタイマをスタートさせて30秒等所定時間のカウントを行う。そして、タイマがカウントアップしても異常検知信号を受信し続けていたら、天井スピーカ8に加えて外設スピーカ9から警報を発報させると共に、アダプタIF35、伝送線L8を介して居室親機3に異常発生信号を送信する。

10

このとき、アダプタCPU34は、音声メモリ29から、異常検知信号の種類に応じたアナウンス音声を選択して取り出し、スピーカIF33、伝送線L7を介して外設スピーカ9に送信し、異常発生を音声により報音させる。ここでは生活異変センサ6の異常検知であるため、例えば「生活異変センサが動作しました」のアナウンスが報音される。

【0022】

居室親機3に伝送された異常発生信号は、親機第2IF26を介して親機CPU24が受信し、親機CPU24の制御により親機通話部21のスピーカから異常発生を鳴動報知させ、親機表示部22に異常発生を表示させる。また、居室親機3に伝送された異常発生信号は、親機第2IF26、伝送線L3を介して住戸玄関機2に送信され、子機IF17を介して異常発生信号を受けた警報表示灯16は発光動作する。

20

更に、異常発生信号は、親機第1IF25、親機幹線L2を介して管理室親機4にも送信され、管理室親機4からも警報が発せられる。

【0023】

但し、センサ動作が誤動作であり、タイマがカウントアップするまでに誤報であることに気づいた居住者により、復旧ボタン32が操作される等の発報停止操作が成されたら、アダプタCPU34は異常検知信号及び異常発生信号を停止させる。その結果、天井スピーカ8からの発報が停止し、発報動作は終了する。この場合、外設スピーカ9や居室親機3が発報動作することもない。

30

【0024】

このように、生活異変センサが異常を検知すると、天井スピーカと外設スピーカの双方で異常発生を報知するので、居住者自身に加えて近隣の居住者も異常発生を把握し易い。但し、外設スピーカは異常が発生してから所定時間経過してから警報を発するので、誤報である場合は、外設スピーカが発報する前に居住者が停止させる等の処置を行うことができ、外設スピーカからの発報に対して誤報を無くすることが可能となり、近隣住人や管理人に余計な手間を掛ける事態を防ぐことができる。

また、居室親機は既存端子である移報接点入力部を使用してセンサアダプタからの信号を受信するため、居室親機の改造が不要となり、コストアップと成らない。

更に、生活異変センサの作動内容が音声で報音されるので、どのような異常が発生したのか速やかに認識することができ、対処し易いし、住戸玄関機からも異常発生が発光報知されるので、近隣の居住者が聴力の衰えた人でも異常発生を認識できる。

40

【0025】

次に、生体モニタ装置7から入手している居住者の生態情報が、異常値或いは異常状態を示した場合の動作を説明する。センサアダプタ10は、上述したように生体モニタ装置7から、脈拍数、立っているか寝ているかの姿勢情報等の居住者の身体状態の情報を入手している。そして、これらの情報から、例えば脈拍が明らかに正常範囲を逸脱した、或いは居住者が長時間横になったままである等の情報を入手したら異常発生と判断して、警報発報動作を実施する。

【0026】

50

この発報動作も上記生活異常センサ動作の場合と同様の動作となる。具体的に、最初に天井スピーカ 8 で警報音を鳴動させる。このとき、アダプタ CPU 3 4 は、音声メモリ 2 9 から、異常を検出した生体モニタ装置 7 に応じたアナウンス音声を選択して天井スピーカ 8 に送信し、異常発生を音声により報知させる。例えば「脈拍が異常です」のアナウンスが天井スピーカ 8 から報音される。

【0027】

また、アダプタ CPU 3 4 は、異常発生の判断に合わせて図示しないタイマをスタートさせて 30 秒等所定時間のカウントを行う。そして、タイマがカウントアップしても生体モニタ装置 7 から引き続き異常な状態を示す情報を入手し続けたら、天井スピーカ 8 に加えて外設スピーカ 9 から警報を発報させると共に、居室親機 3 に異常発生信号を送信する。このとき、外設スピーカ 9 からは、生体モニタ装置 7 からの情報が異常を示すため、例えば「居住者に異常が発生しました」のアナウンスが報音される。

【0028】

そして、タイムアップを受けて居室親機 3 に向けて異常発生信号が伝送され、この異常発生信号を受信した親機 CPU 2 4 は、親機通話部 2 1 のスピーカから異常発生を鳴動報知させ、親機表示部 2 2 に異常発生を表示する。更に、異常発生信号を管理室親機 4 に送信すると共に、居室親機 3 を介して住戸玄関機 2 にも異常発生信号が送信され、住戸玄関機 2 の警報表示灯 1 6 を発光動作する。

【0029】

但し、生体モニタ装置 7 の誤動作による異常報知の場合、タイマがカウントアップするまでに誤報であることに気づいた居住者により、復旧ボタン 3 2 が操作される等の発報停止操作が成された場合には、アダプタ CPU 3 4 はその時点で天井スピーカ 8 からの発報を停止して発報動作を終了する。この場合、外設スピーカ 9 からその後発報されることもない。

【0030】

このように、生体モニタ装置からの情報が異常を示す情報である場合、生活異常センサの場合と同様に発報動作するので、近隣の居住者が異常発生を把握し易い。しかも、異常発生内容が音声で報音されるので、どのような異常が発生したのか速やかに認識することができ対処し易い。

【0031】

尚、セキュリティセンサ 5 が動作した場合は、異常発生信号が伝送線 L 4 を介して居室親機 3 に伝送される。親機センサ I F 2 7 を介してこの信号を受信した親機 CPU 2 4 は、親機通話部 2 1 のスピーカから警報を発報させると同時に、親機表示部 2 2 に警報内容を表示させる。更に住戸玄関機 2 の警報表示灯 1 6 を点灯させると共に、管理室親機 4 に異常発生信号を送信して、管理室親機 4 でも警報発報動作させる。このように、セキュリティセンサ 5 は、直接居室親機 3 に異常発生を送信して居室親機 3 が発報するため、センサアダプタ 1 0 を使用した生活異常センサ 9 や生体モニタ装置 7 とは互いに信号経路が異なる。そのため、セキュリティセンサ 5 側の配線経路を触ること無く、センサアダプタ 1 0 側のセンサの変更等を行うことができ、生活異常センサ 6 等を変更操作してもセキュリティセンサ 5 側の信頼性が劣化するようなことがない。

【0032】

また、上記実施形態では、居室親機 3 の移報接点入力部にセンサアダプタ 1 0 を接続しているが、居室親機 3 にセンサアダプタ 1 0 専用の端子を設けて接続しても良い。こうすれば、天井スピーカ 8 や外設スピーカ 9 から報音させるメッセージ音声を居室親機 3 に送信することが可能となり、異常発生の具体的内容を居室親機や管理室親機等に通知することが可能となる。

【図面の簡単な説明】

【0033】

【図 1】本発明に係る集合住宅インターホンシステムの実施形態の一例を示す構成図である。

10

20

30

40

50

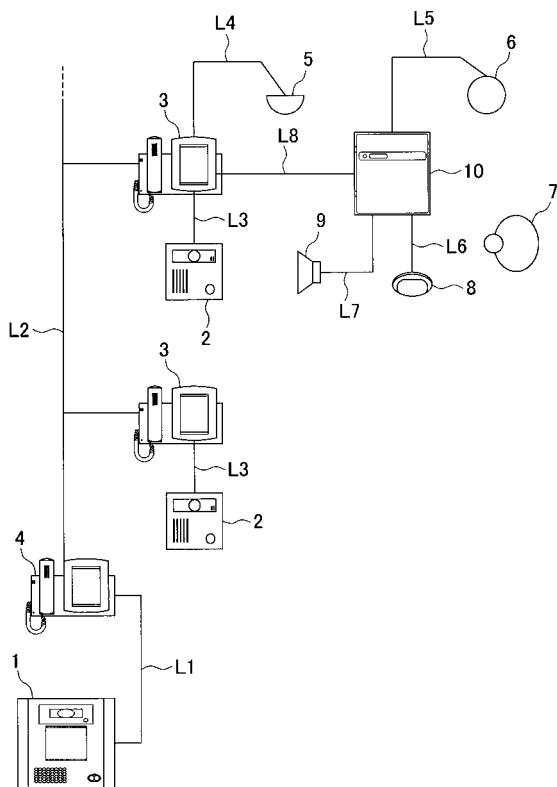
【図 2】 図 1 の各機器の要部を回路ブロックで示した構成図である。

【符号の説明】

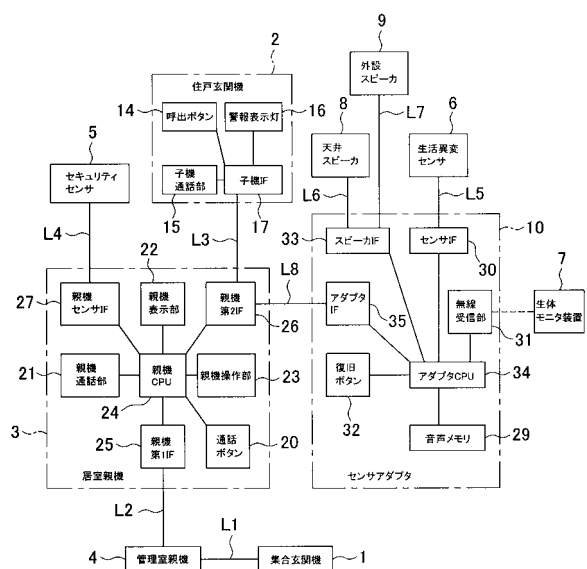
【0034】

1・・・集合玄関機、2・・・住戸玄関機、3・・・居室親機、4・・・管理室親機、5・・・セキュリティセンサ、6・・・生活異変センサ、7・・・生体モニタ装置、8・・・天井スピーカ、9・・・外設スピーカ、10・・・センサアダプタ、16・・・警報表示灯（警報表示部）、24・・・親機CPU（親機発報制御部）、26・・・親機第2インターフェース（移報接点入力部）、29・・・音声メモリ、34・・・アダプタCPU（アダプタ発報制御部）。

【図 1】



【図 2】



フロントページの続き

Fターム(参考) 5C086 AA01 AA02 AA22 BA03 DA01 FA06 FA18
5C087 AA02 AA03 AA19 AA37 AA44 BB03 BB11 DD03 DD04 DD07
DD36 EE08 FF01 FF02 FF04 FF24 GG40 GG83 GG84
5K038 AA06 CC12 DD18 EE02 GG02